

② ヨコハマ映画祭

■ 鈴木たけし

1 始まり

映画ファンが、当初からスポンサーをつけず企画・運営・実行に当たり、赤字分は貯金をはたき継続してきた映画ファン手作りの祭りが、十七年目を迎える。夢のように過ぎていった日々。ここでは既に五百人を超える映画人が受賞し、招かれ、祭りに参加した。そうした映画人と映画ファンが交流し、刺激しあう広場として、ヨコハマ映画祭は生き抜き、ハマの名物行事として、また先見性に富んだ観客賞感覚の映画賞との評価が定着してきた。もちろん、そんな評価は過褒のそしりを免れないが、映画文化をこれ以上衰退させてはならぬとする映画関係者やファンの切ない意思が、当映画祭をここまで育てて下さったと感ぜずにはいられない。

横浜の映画状況の後進性を打破し活性化するキツカケを映画ファン(市民)の側から作っていきたい、そんな願いから、ヨコハマ映画祭の構想はスタートした。また、お祭り好きな映画ファンが年に一度、日ごろ世話になっている映画に感謝を込めて、映画人を巻き込み大いに騒ぎたいというのが、この映画祭の根幹だった。

ヨコハマ映画祭の歩みを簡単に振り返って

みたい。三人のサラリーマンが相談して始めたさやかな映画祭だった。素人がこうしたイベントを開くことの様々な困難を十分話し合った上での決断だった。確かに、我々には何もなかった。スポンサーにも、行政にも、映画界にも、何もコネがなかった。ないから自分たちの力でやれるところまでやろう。いかにも素人くさい大胆不敵な発想からスタートした。そしてスポンサーをつけない、という発想はヨコハマ映画祭の一大特長として受けとめていただけのようになり、逆にマスコミなどがこの点を大きく評価して好意的に取り上げて下さるケースが多く、これが今日まで持続する決定的な要因となるのである。

鶴見にあった名画座・京浜映画劇場が趣旨に賛同して下さり、破格の条件で会場提供をして下さることになった。そこで、映画仲間

に声をかけ、実行委員会を組織した。選考委員は、熱狂的映画ファンや若手映画評論家など三十数人で構成、その投票により日本映画のその年度の各個人賞(監督賞、主演男女優賞、など十一部門)と作品ベストテンを選出し、その結果で映画の上映や表彰式を中心とした映画祭を開く、との骨子にした。

でも多額の赤字が予想された。しかし、これは映画ファンの心意気の祭りなのだから、スポンサーをとって赤字の埋め合わせするなどということは全然考えなかった。好きなことを好きなようにやるのだ。多少のリスクはつきものだど割り切った。

イベント終了後のスタッフ (第12回)



1—始まり
2—初期
3—困難
4—展開
5—課題

2 初期

第一回ヨコハマ映画祭は、一九八〇年二月に開催された。通路まで立見客でぎっしり埋まる盛況で、マスコミ各社も数多く取材に駆けつけてくれ、「手作り映画祭、大成功」(朝日新聞)などと報道してくれた。もちろん問題がなかった訳じゃない。観客のアンケート調査をしたところ、ヨコハマ映画祭と名乗る催しにもかわらず、横浜在住の人より東京からの参加者の方が多かった。いくら東京寄りの鶴見という立地条件とはいえ、横浜を名乗るイベントに東京の人間が集まる。これはちよつとシヨックだった。改めて横浜の映画状況の後進性を考えさせられ、複雑な思いだった。

第二回も同じ京浜映画劇場で、翌年、今度は二日間のイベントとして開催、これも超満員の盛況だった。この時は、薬師丸ひろ子、松田優作(故人)など当時の人気スターが数多く参加、実行委員はその警備で神経をすり減らしたものだ。また、この年の作品賞「ツイゴイネルワイゼン」の横浜初上映は大きな反響を呼んだ。第一回の時も柳町光男監督「十九歳の地図」が初公開で、以降商業ベースに乗らず未公開になっている作品の上映がこの映画祭の名物のひとつになった。

第二回映画祭を終えて数か月、突然、京浜映画劇場が三十年の歴史にピリオドを打って閉館してしまった。横浜の映画ファンの心よりどころであった唯一の名画座の閉館はつらかった。このため、同館の庇護を離れ、我々はひとり歩きせねばならなくなった。

会場探し、映画会社やゲストとの交渉、興行組合との調整など、これまでにない雑多な困難がふりかかっていた。第三回目は、会場として今の関内ホールの前身である市民ホールを抽選で引き当てたが、以後、八回目から現在の関内ホールに定着するまで、毎年のように会場探しに奔走するハメとなる。

3 困難

第三回映画祭には色々思い出がある。過去二回の大入りに気を良くして、PR活動に手抜きがあったせいも、客席に閑古鳥が鳴いた。故に大赤字。その埋め合わせが私たちにモロに降りかかっていた。また映画館の館主さんたちの集合体である興行組合との調整問題は、これまで映画館を会場としていた時には考えられないほどのネックとして浮かび上がってきた。興行組合との調整・協調はその後の映画祭開催の大きなテーマとなった。

一方受賞関係では、この年のあらゆる映画祭、映画賞を欠席した高倉健さんがロケ地からわずかの空き時間を利用して駆けつけてくれたのにはスタッフ、観客共々大感激だったが、これがヨコハマ映画祭を伝説化し、知名度を一気に高める結果となった。この後、毎回受賞者のほとんどが表彰式に出席、この賞を励みにしてくれるようになった。

また、この年の上映作品に「狂った果実」というロマンポルノ作品があったため、市民ホールでの上映をめぐる市の内部で賛否の論議を呼んだが、当時のホール館長の「市民に支持されている立派な催し。ポルノ拒否は時

代への逆行。ハイカラではトップをいく横浜市が取るべき態度ではない」とのツルの一声で決着がつけられた。若者文化が守られたと、我々は喝采を叫び、大きく新聞報道され話題になった。

第四回目は引き続き市民ホールで開催されたが、収支をトントンにまで挽回した。この頃からヨコハマ映画祭のイメージも一般に浸透するところとなり、若い市民の作るハマの名物行事として認知してもらえるようになった。そして、ここに至り横浜の映画ファンの参加が東京からのそれを上回るようになったのもうれい事実であった。九州や北海道から参加してくれる人まで出た。映画祭が続く限り参加します、なんて泣かせる殺し文句を言ってくれる人もいた。毎回、映画祭が終わるとブツ倒れ、赤字の工面で途方にくれたが、そんなことはささいなことに思え、こっちは都合だけではやめるにやめられなくなった。

この年の秋から、映画祭のスペシャル企画として映画館とタイアップして「二十四時間フィルムマラソン」「日活ロマンポルノ祭り」「監督を囲む会」など様々なイベント挑戦をし、次第に興行組合とも良好な関係を作れるようになってきた。

こうして足固めができたように思えたが、四回目の後、会場としていた市民ホールが取り壊されることになり、またしても我々は会場探しに奔走することになる。五回目は県立青少年センター、六回目は県立音楽堂ときて、それぞれ次年改装となり使用不可。七回目はどこのホールに依頼しても行政サイドにお願いしても、ヨコハマ映画祭に特別な配慮は出

来ないと断られ大ピンチを迎えた。中止の決断を迫られたタイムリミットに捨てる神が現れた。映画館の横浜につかつ劇場が日曜日を含め三日間の会場提供してくれたのだ。これは大変なことだった。大手直営系列館が稼ぎ時の土、日曜を他のイベントに劇場を提供するなんてことは考えられないことだった。これは当時の支配人が我々を見かねて、本社サイドの反対を押し切り実現してくれたことだった。私たちは今もこの人を映画祭の恩人として感謝、尊敬をしている。こんなバカなひとがいるから世の中楽しいとしたたかに思い知らされた。私たちの財産はこうした、人との出会いだと思っている。

4 一展開

五回目は超満員で前夜からの徹夜組が数十人も出て、いよいよ映画ファンの熱気が充満する映画祭に成長してこられた。そしていつもは賞を映画人に差し上げる立場なのに、逆にお礼として監督や俳優さんから壇上で花束をいただくなんていう僥倖(ぎょうこう)を得た。八回目から現在の関内ホールに会場も落ち着き、ジブシー映画祭と決別できた。当初はホール側から使用についての格別の配慮をいただいたりもしたが、時の経過と共にそれも難しくなり、今は横浜市が共催して下さり行政の支援を受けながら、スポンサーをつけずに継続している。十回目には、当時の超

人気アイドルグループ・男闘呼組が受賞し、それ目当ての女子中・高生ファンで会場が埋め尽くされ、これでは映画祭にならんとスタッフが落胆していたら、意外に彼女たちは映画をすっかり楽しんでくれたのはうれしい誤算であった。第十一回目には、飛び切りうれしかったことがあった。初期の映画祭のスタッフであった阪本順治という若者が「どついたりねん」という映画で監督デビュー、それだけでもうれしいうにその年の映画賞総ナメの事態となり、もちろんヨコハマでも文句なしの受賞。我々の元に鮮やかに華やかに凱旋してくれた。映画祭がヒーローを生み出したのだ。

第10回ヨコハマ映画祭表彰式



5 一課題

一昨年には、当映画祭がヨコハマ遊大賞を受賞の栄に浴した。他人を顕彰することにはなれていても、自ら御褒美をいただいたことなど皆無だったので、感無量だった。ヨコハマの文化人の先生方が選んでくださるこの賞はいかにもオシャレで、スタッフ一同天にも昇る心地と喜ばせて頂いた。

そんなことで、ヨコハマ映画祭を十六年続けてきた。内外には問題山積である。日本映画の興行動員力は低落の一途である。しかしそれは質的低下と別問題なのだが、なにか日本映画が世の中の駄目なものの象徴みたいに言われてしまう。これは間違いだ。だから、それを正すためにも、当映画祭は日本映画の応援団としてまだまだ頑張るつもりだ。ただ優秀で力量のある監督たちがなかなか撮れないという状況は何としても残念だ。

ヨコハマ映画祭も前回やや鈍い動員で八年振り赤字を計上した。正直なところ、台所は苦しい。次回が正念場である。また、スタッフ的にも、若い力の導入と世代交替が、映画祭持続への大きな課題だ。万難を排してこの映画祭を継続していくこと、それが映画祭をここまで育てて下さったすべての恩人たちへ報いる我々の唯一の道だと心得ている。

△ヨコハマ映画祭実行委員会代表